

## 飛鳥寺塔心礎に埋納された 真珠小玉

奈良文化財研究所がおこなっている飛鳥寺塔心礎出土品の再整理作業において、白色不透明な材質不明の小玉が少なくとも13点以上含まれていることがわかりました。大きさは、直径1.5～2mmと極めて微小ですが、孔があけられています。これらの多くは埋蔵中に劣化し、周囲の銅製品に由来する緑色の錆によって汚染されていましたが、一部に写真のような光沢を残すものも確認されました。

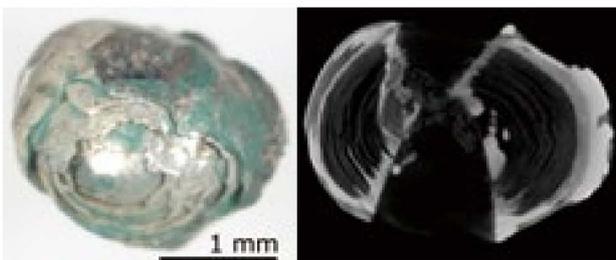
これらの小玉の材質や内部構造をあきらかにすべく、マイクロフォーカスX線CT撮影を実施したところ、非常に細かい層構造をなすことがわかりました。さらに、蛍光X線分析およびX線回折分析で材質調査をおこなった結果、炭酸カルシウムを主体とする物質であることがあきらかとなり、これらの微細な小玉は真珠の可能性が高いと結論付けられました。

また、X線CT画像から穿孔方法についてもあきらかとなりました。孔径が0.5mmにも満たない非常に微小な孔があけられていますが、その形状は開孔部から中心に向けて細くなっており、二方向から穿孔されたことがわかります。製品の大きさはやや異なりますが、類似の方法で穿孔された真珠製の玉が正倉院宝物に残されています。

これまで、飛鳥寺塔心礎埋納物は古墳時代的な特徴が強調されてきましたが、真珠は古墳の副葬品には例外的にしか確認されていません。いっぽう、仏教において真珠は七宝の一つに数えられることもあり、今回の発見で飛鳥寺塔心礎埋納物は古墳文化とは異なる仏教施設の荘厳具としての新たな様相を具備していたことがあきらかとなりました。

現在、これら真珠小玉の貝種の同定や他の古代寺院出土品と比較研究を進めています。

(埋蔵文化財センター 田村 朋美)



真珠小玉写真

X線CT画像